

科学技術の良心 第2回

コメントより

- 1) 科学と社会の関係は科学者と市民の双方によって行うべき。
- 2) 現代は価値相対化の世界なので、信仰に立ち返るのが良い。
- 3) 科学技術の進歩が子どもの運命を決めてしまう時代
- 4) 科学技術の進歩に対する言い表せないような不安感、恐怖感
- 5) 人間の価値が性格よりも能力重視になるのでは？人間の多様性が重要。
- 6) 研究の中で予想しなかった副産物が人間に大きな影響を与える場合がある。

誰が科学技術の良心を考えるのか？

科学者の良心 = 「研究の自由」に基づく

研究者の真理探究という自覚

科学コミュニティにおける共通の基準での研究競争

科学研究は社会の中でこそ意味がある

例：医学における臨床研究不正

国の政策としての科学技術

=国は国民の幸福を目的とする政策を定め実施するという「良心」

しかし、国の科学技術政策は誰が決めるのか

例：再生医療

利用者の良心

今日の前にある使える科学技術を使わないでおく、という良心

例：新しい出生前診断技術

科学者が良心に従って作り出した成果を使う、という良心

⇒科学技術を使うことにより、さらに科学技術を発展させるアイデアを生む